合同 No.４７０

「わたしたちの『ティベリアス』で」

東浦和教会牧師
和泉　美和子

「その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちにご自身を現わされた」（ヨハネによる福音書２１章１節）。

復活されたイエス様が４０日間、弟子たちとどのように過ごされたか、一つのエピソードがヨハネによる福音書の２１章に描かれています。その場所は「ティベリアス湖畔」とあります。あまり聞きなれない湖の名前です。新約聖書の中には三回出てきていて、すべてがヨハネによる福音書の中にあります。名前の正体は、６章１節を読めば分かります。「その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた」。なんだ～と思われたでしょうか。ティベリアス湖はガリラヤ湖のことでした。

なぜ、ヨハネはわざわざ別名で書き残しているのでしょうか。ヨハネによる福音書が書かれた時代は１世紀末です。その頃、ガリラヤ湖はティベリアス湖と呼ばれるようになっていたので、福音書の読者たちはこの呼び名に慣れているということもあったかもしれません。ただ、「ティベリアス」というのは、ローマ皇帝の名前です。ヘロデ王がガリラヤ湖の西側に建てた町にその名前を付けたことから、ガリラヤ湖のこともティベリアス湖と呼ぶようになったいきさつがあります。ですから、ティベリアスと呼ぶたびに、ローマの支配、皇帝の影を感じる、ユダヤ人たちにとっては、好ましくない名前であったことは確かです。

６章で描かれているのは、イエス様がティベリアス湖畔で五千人の男（女・子どもを含めればもっと多くの人）たちを、五つの大麦のパンと二匹の魚で満腹にさせてしまうという奇跡の物語です。パンと魚を持っていたのは少年でした。おそらく少年奴隷です。大麦のパンは、小麦のパンに比べると貧しいものでした。貧しい立場にある少年が差し出した貧しい食べ物。ですが、イエス様が手に取り、感謝の祈りをささげると、多くの人たちを満たすものになりました。そして、それはその場にいた人たちが満腹になって終わりではありません。パンの屑を集めると１２の籠にいっぱいになり、まだまだ祝福のパンは多くの人たちに分け与えられることが暗示されています。

そして２１章では、同じティベリアス湖畔で、漁に出たものの、何の収穫もなかった弟子たちが登場します。様子を岸から見ていたイエス様が「子たちよ、何か食べ物があるか」と声をかけ、弟子たちは「ありません！」と答えます。彼らは岸に立っている人物がイエス様だと気付いていません。その人物が「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」とアドバイスします。弟子たちはきっと半信半疑だったことでしょう。それでも言うとおりにしてみたら、もはや網を引き上げることのできないほどの大量の魚が網にひっかかったのです。弟子たちは「主だ」と気が付きます。五つのパンと二匹の魚を分け与えた後、信じられないくらいに集まった籠いっぱいのパン屑の重さを体験していた彼らは、信じられないくらいに集まった魚の網の重さに、再び主の恵みの重さを味わったわけです。

町や湖にローマ皇帝の名前を付けて呼ぶということは、この世の権力の大きさにあやかり、またその存在を崇めるというあらわれです。しかし、ヨハネによる福音書は、そういう場所で、主イエスのみ業が起こったということを、わざわざ「ティベリアス湖」と言うことで強調しています。

わたしたちが生きている場所も、この世の力と影響を大いに受けている場所ばかりです。「ここは居心地が悪い」「悪条件だ」「不利な立場に立たされる」・・・、アウェイ（敵地）に遣わされていることのなんと多いことでしょうか。しかし、その場所は、貧しくとも用いていただきたいと自分自身を主にささげるなら、主のみ業と栄光に包まれる場所となります。主のみ声に聞き従うならば、この世の影響力を覆うほどに、主の偉大な影響力が発揮される場となるのです。わたしたちの「ティベリアス」で、わたしたちは主の臨在を味わうことができるのです。